

第1回 静岡市持続可能な森づくり研究会 会議録

【日 時】令和7年4月28日（月）17:00～19:00

【場 所】静岡市役所新館8階 市長公室（葵区追手町5番1号）

【出席者】＜静岡市持続可能な森づくり研究会＞

静岡県立農林環境専門職大学 学長	鈴木 滋彦
速水林業 代表	速水 亨
WWF ジャパン自然保護室森林グループ長	相馬 真紀子
静岡市森林組合 代表理事組合長	渡辺 武
清水森林組合 代表理事組合長	中山 勉
井川森林組合 代表理事組合長	森竹 史郎
静岡市木材業協同組合 理事長	佐野 賢輔
林業家（狩野林業株式会社 代表）	狩野 正明
林業家（株式会社 MARUGOH 代表取締役）	鈴木 勝貴
葵区自治会連合会（梅ヶ島地区連合自治会長）	小泉 住雄
駿河区自治会連合会（川原地区連合自治会長）	白木 康雄
清水区自治会連合会（両河内地区連合自治会長）	中山 治己

＜オブザーバー＞

WWF ジャパン自然保護室森林グループ	天野 陽介
---------------------	-------

＜静岡市＞（事務局：森林経営管理課）

市長	難波 喬司
環境局 局長	大村 博
森林経営統括監	大畑 夏男
環境政策監	織部 康弘

森林経営管理課 課長	劔持 章
治山林道担当課長	小山 敬久
課長補佐兼企画係長	宮川 研吾
事業推進係長	山本 剛大
企画係 主査	大友 光夫
企画係 主任主事	山田 祐記子
企画係 主任主事	保坂 洋斗

- 【議 事】（1）研究会の目的
（2）静岡市の森林の現状と課題
（3）環境林と循環林のゾーニング

【内 容】

＜市長挨拶＞

難波市長：委員の皆様には委員を受けていただきまして本当にありがとうございます。今回は持続可能な森づくりということで、静岡市は10万ヘクタールを超える森林があって、面積でいうと全国で6番目とされています。森林の公益的機能というの

は本当に大事で、この広大な面積を持っている静岡市の中において、森林の公益的機能を確保していくというのは非常に大事だと思っております。そして、林業は地域にとっても基幹的な産業ですので、振興していくことが大事だと思っております。ただ、今朝もいくつかの場所を見てきましたが、持続可能ではないなというような状況がたくさんございます。これから新しい時代の持続可能な森林の管理を考えていく必要があるので、森林あるいは林業関係でご尽力されてきた方、識見のある方々にお集まりいただいて、持続可能な森林の管理運営について考えていきたいと思っております。こちらの写真をご覧ください。これは極めて立派な林道がついているところですが、この付近ではこのように管理されていない場所もあります。林内に光が入ってこないという状況にあります。

こちらと同じようなところですが、一部手が入ってはいますが長いこと管理されずに細く成長し、合板には使えるが柱としては使えない状況です。

こちらは崖が落ちていますけど、次から次へと落ちていく、落ちたところが下流に流れていって、河川に堆積するということもあります。これも何とかしていかないといけないという状況です。

これは皆伐したところですが、スギとヒノキを新しく植えてありました。ここは循環林と言って生産性があるところですので、再造林で使えるようになるかもしれませんが、このような場所はもう少ない状況ではないかと思えます。

こちらには先ほどのような立派な林道がありますが、崖に落ちているという状況です。くぼ地に設置したという元々の作り方が悪く、雨が降ると水が溜まって下から抜けていく状況です。ここを直しても、この上にはあまり林道がなく循環林になりそうな森林が無い状況です。このような林道を果たしてこれから維持していくのかどうかということも、しっかり考えていかないといけない状況です。

こちらは沢の横ですが、林内に光が入って広葉樹も生えてきて良い状況ですが、その奥はこんな状況です。

こちらの林道は維持するのはもう無理かなというような状況です。このような林道をこれから先維持していくのかどうか、というような状況があります。

こちらは油山の集落で、これは県が作った砂防堰堤だと思いますけれども、この辺りは、先ほど小規模で崩壊していたのと同じような状況で、上に手をつけられないので、どんどん落ちてきているようです。このような場所はこれから増えていく可能性があり、そして落ちてくるとやはり災害が起きます。ここは実際に災害が起きた油山の集落ですが、これも何とかしていかないといけないということになります。

委員の皆様、現場でおやりになっている方も多いので、今の状況は非常によくわかっておられると思います。人口も減少し市の財政上の負担もなかなか厳しい状況になってくる中で、そして山にける人手も少なくなってくる中で、これからどういう管理をしたらいいのか、この時期で本気で考えねばなりません。今までは、これまでの延長上で事業を実施してきて、なんとかまだ維持できる状況ですが、これから先10年20年、今の状態を維持できるかどうかというと、ちょっと厳しい状況になっていると思います。ここで皆様のお知恵ご知見をお借りして、これからの静岡市の持続可能な森林管理の問題を考えていきたいということです。よろしくお願いいたします。

鈴木会長挨拶：会長にご指名をいただきました静岡県立農林環境専門職大学学長の鈴木と申します。よろしくどうぞお願いいたします。

静岡県立農林環境専門職大学というのは、6年前に静岡県に開学しました農業、林業、畜産のプロフェッショナルを養成するという、新しいタイプの大学でございます。若者と、日本の農業、畜産、そして林業の将来をどうするか、そういう仕事を務めさせていただいているところです。

先ほど市長さんからお話がありましたように、これから先、10年20年、あるいはもう少し先に向けて、今どうしたらいいというようなところを取りまとめていきたいと思います。司会進行等はいたって非力なところがありますので皆様の積極的なご発言ご意見を賜りますようお願い申し上げます。

<会長選任>

市長の指名により、会長（議長）に鈴木滋彦委員を選出

<委員自己紹介>

速水委員：三重県で林業をやっていますが、静岡市の狩野さんと親しくさせていただいており、県内では天竜ともつながりがあります。静岡市の森林の将来についての議論に加わらせていただいております。持続可能な林業経営においては、木材価格が上がらないのがネックになっています。静岡市でも再生林の問題があるのだろうと考えています。

相馬委員：WWF ジャパンは世界自然保護基金ジャパンという正式名称として、本部はスイスのジュネーブにあります大体世界100カ国ぐらいで展開している、いわゆる環境団体、国際環境団体です。その森林グループのグループ長をしております。WWFとしては国際森林認証の推進や、東南アジアや南米の森林保護に軸足を置いてきましたが、ここ数年は国内の森林保全にも取り組んでいます。

渡辺委員：3年前から静岡市森林組合の組合長に就いています。初年度に台風10号の被害があり、大変な思いをしました。施業地の被害で財政的にも厳しい状況でしたがなんとか持ちこたえました。循環林は林道無しには成り立ちませんが、林道が崩れてしまうのは環境林の整備が不十分だから、という部分もあると思います。

中山勉委員：清水森林組合から来ました。異常気象で山や道が崩れることがあります、めげずにやっています。森林の保全という考え方のもと、先人が植えた経済林として大事にしつつ、固定化せず流動的に管理していくことも考えています。

森竹委員：井川森林組合では、広葉樹林も多く扱っています。広葉樹林は環境林に区分される、食えない、と聞いてやる気を失っているところです。どうしても市街地から距離があるので採算性を考えると難しいところがありますが、お知恵をいただきたいです。

佐野委員：静岡の木材の協同組合の理事長をやっています。木材生産の出口のほうで、建設会社、大工、工務店といったところに近い団体です。オクシズ協議会の事務局も担っており、20 年来、市の助成を受けながらプライドを持って地域材の活用に取り組んでいます。

狩野委員：狩野林業という林業作業をする会社の代表をやっています。どんな形で役に立てるかわかりませんが、委員をやらせていただきます。

鈴木勝委員：先祖が林業をやっていましたが、製材業を経て現在は不動産業を営んでいます。（公財）国策研究会の幹事をやっている関係で、この森づくり研究会の企画の時から話をさせてもらっていて委員になりました。計画の策定が研究会の着地点になるのではないかと思います。現実とかけ離れた理想的な管理計画ではなく、実情に沿った現実と理想を組み合わせた政策を立案できればと思います。

小泉委員：梅ヶ島連合自治会長で、葵区自治会連合会として委員になっています。林業をやっていますが、梅ヶ島は観光業が盛んなところで、林業の樹種はスギヒノキと広葉樹の割合が半々か広葉樹が多いくらいです。梅ヶ島は「埋まる島」に由来するくらい崩れが多かった場所ですが、広葉樹を植えて緑になってきているのが現状です。他の場所とは少し違う林業をやっています。

白木委員：川原地区連合自治会長で、駿河区自治会連合会として委員になっています。川原地区は山のない地区ですが、自分は 50 年以上狩猟をやっているため委員になりました。最近では手入れされず荒れた山が多いです。小坂地区のミカン畑も荒れています。人間が手入れをし匂いを付けた林道や農道は、人間と動物との結界となっていました。手入れせず荒れると、動物も多く降りてくるようになります。狩猟会で有害駆除をやっていますが、狩猟会のメンバーもこの 50 年で約 2500 人から 300 人に減少し、10 年くらいでメンバーがいなくなるのではないかとこの問題があります。

中山治委員：両河内地区連合自治会長で、清水区自治会連合会として委員になっています。両河内地区は山が多く、林業家もいますが、農林業は苦戦しています。また、住み続けられるまちづくりを考えるうえでは、防災の観点から森林が大きなファクターとなっており、森林は経済のファクターでもあります。ここで勉強したことをまちづくりに活かしたいと考えています。

<事務局説明>

剣持課長：資料に沿って説明いたします。2 ページをご覧ください。

静岡市の森林面積は約 10 万 7 千ヘクタールで、県内平均の約 64%を上回る市総面積の 76%を占めます。図 1 のとおり、市域の大部分を森林が占めていることがおわかりいただけるかと思います。この広大な森林を適正に管理していくことは、静岡市にとって非常に重要なことです。

この森林は、木材生産だけでなく、山地災害防止、生物多様性の保全、地球環境の保

全など、様々な公益的機能を持ちますが、適正な森林管理が実施されないことにより、公益的機能を発揮できない荒廃した人工林が増加しています。この状況では、土砂災害などの発生リスクを増大するおそれがありますので、森林の有する公益的機能を高度に発揮できるよう、関係者が目標を共有したうえで、適正な森林経営管理を推進する必要があります。

このため、本日開催の静岡市持続可能な森づくり研究会において、有識者や実務的な知見を有する方などからご意見をいただき、そのご意見をベースに静岡市における適正な森林経営管理の指針となる（仮称）ですが、静岡市森林経営管理計画の策定することとしました。

3 ページをご覧ください。この研究会についてですが、森林林業政策に関し優れた識見を有する方、実務的な知見を有する方、地域の代表の方にお集まりいただいております。これから計画策定に向けて、静岡市の森林経営管理の基本方針に関すること、その基本方針を踏まえた静岡市の施策の方向性に関すること、その他必要があると認められることに関し、活発なご意見をいただきたいと考えております。

1 年間の研究会のスケジュールですが、各回のテーマ、ここに書かれているものは予定ですが、前半で研究会からの提言を踏まえ、静岡市森林経営管理計画の案を作り、後半では新規事業のフォローアップや、市民の皆さんの意見を受けて計画案のブラッシュアップを行い、来年度以降の方向性についてご意見をいただく予定です。

続きまして、静岡市の森林の現況と課題について説明いたします。4 ページをご覧ください。

3 つの観点から現状を説明していますが、1 つ目は地形条件から見る課題です。戦後の拡大造林政策により植えられたスギ、ヒノキが主伐期を迎えていますが、その多くが伐採されていません。適切な時期の伐採が進まない要因の一つとして、地形が急峻で施業が難しいことが考えられます。市内における主伐期を迎えた人工林の割合は 84% で、全国平均の 63% と比べて多くなっています。図 2 では傾斜がなだらかで林道からの距離が短く、効率的な施業が可能な森林を色付けした地図ですが、森林域のほとんどの場所が急峻で施業に向かないということがわかるかと思います。グラフは、市内の人工林の林齢ごとの面積で、主伐期を超えた人工林が多い他、間伐が進んでいない人工林も多いことも示しています。

この状況で起こっている問題としては、主伐できないことで木材生産による収入が無く、適切な間伐などの施業が行われていない箇所が多くなっており、そのような場所で、過密植栽による樹冠閉鎖が発生し、公益的機能が低下していると考えられること、もう一点、効率的な施業が可能な森林が細かく分散しているため、施業する際には周辺の条件の悪い森林でも作業を行わざるを得ないことがあります。

この問題に対しては、木材生産による収入が無くても適正に森林管理を行うことができる仕組みを構築することを検討していきます。

5 ページに移りまして、2 つめは林業の状況からみる課題です。

日本国内の林業では、森林所有者の収入に相当する山元立木価格（やまもとりゅうぼ

くかかく) に対し、育林(いくりん) 経費がかなり高くなっています。図3は2021年の全国のデータですが、50年生のスギ人工林の主伐を行った場合、丸太の販売額1ヘクタールあたり364万円のうち、7割以上が伐出(ばっしゅつ)、運材などのコストであり、立木価格すなわち木材収入は101万円となっています。それに対し、スギ人工林を造林するのにかかる初期費用は186万円となっています。静岡市でも同様の状況と推測されます。

この状況で起きている問題としては、補助金が活用できれば経費が圧縮できるが、50年の育林の対価としての立木価格が、再び造林する経費に対して低いため、森林所有者の再造林意欲を引き出すことができず、再造林されない森林が増加している、ということがあります。

この問題に対して、伐出、運材、造林の効率化、低コスト化による林業事業体の生産性向上を推進することや工務店などからの需要情報を的確に把握した立木を提供することができるシステムをつくることを検討していきます。

6ページに移りまして、3つめは森林所有者の状況から見る課題です。

表2に静岡市の森林所有者1人あたりがもつ森林面積の状況を示しています。所有する面積が5ヘクタール未満の所有者が83%にのぼり、小規模所有者がほとんどとなっています。一方で、市内民有林面積102,960ヘクタールのうち、上位10者でその43%を占めており、ほとんどが井川地区の所有者となっています。

この状況で起きている問題としては、所有する森林面積が小規模であるがゆえに、所有者不明の状態になるなど、管理の継続が難しくなっている森林が多い、という問題があります。

この問題に対しては、森林経営管理制度に基づく小規模森林の集約化を推進することを検討していきます。

次に、資料7ページから、環境林と循環林のゾーニングについて説明します。

森林ゾーニングとは、森林の区画ごとに、重視する機能を割り振り、将来像と管理方針を示す手法です。ゾーニングにもとづき、森林所有者に対し施業を行う時期や場所を指導することで、木材生産を含む森林の様々な機能を、地域全体で高めていく、というものです。静岡市では、この手法により、森林の有する公益的機能の高度発揮を目指す「環境林」と森林の有する公益的機能に配慮しつつ、木材生産を主体として資材を循環利用する「循環林」に、ゾーニングを行い、森林の公益的機能を最大限に発揮させることを目指します。

イラスト左側に記載している環境林の基本的な考え方ですが、生物多様性の保全や水源涵養機能の維持、景観維持・創出などの公益的機能が高度に発揮できるよう適正に経営管理を行う森林、としています。イラスト右側に記載している循環林の基本的な考え方は、森林資源の利用を通じて地域経済の発展に寄与するとともに、CO₂の吸収や水源の保全、生物多様性の保全などの公益的機能の発揮についても配慮し、適正な保全や管理につなげる森林としています。

この環境林と循環林のゾーニングについては、これからご意見をいただくところですが、循環林が木材生産しやすいエリアであるのに対し、環境林は市街地から離れ、林

道が無いような場所のイメージです。このイラストでは、天然林のほか、主伐後に再造林していない人工林を環境林として示しています。

8 ページをご覧ください。環境林と循環林の今後の検討の方向性ですが、環境林については、林業として経営が成立しない伐採跡地や、集落周辺などの場所は、公益的機能を高度発揮させるために適切な管理が必要であり、森林経営管理制度の活用や、新しい森林カーボンクレジットの創出など、持続可能な森づくりの推進を行うことで、適切な管理を行っていくこと、原生林、天然林については、現状維持に努めること、を検討していきます。

循環林については、森林経営の集約化、ICT サプライチェーンの活用、森林Jクレジットの活用など、経営が成り立つ体制づくりの促進を想定しております。

また、現状で循環林としてゾーニングできる森林の中には、適正に管理されていない、集約化や施業の共同化が見込めないという森林もあり、森林所有者の意向によっては、環境林として管理していくところも出てくると想定しております。

事務局からの説明は以上となります。

<委員からの意見>

速水委員：環境林にゾーニングすると、皆伐後に再造林しない森林が生じる。立木価格と再造林後の育林費は別物だが、実際は、再造林しない場所の丸太は安く販売でき、再造林する場所の丸太はそれより高く販売することになる。すると一物一価の法則で安いほうに引っ張られてしまう。「再造林しなくていい環境林」は林業全体を貶めてしまう。

また、環境林にしてしまうと、森林施業の補助が受けられなくなる、森林の価値が下がり売買できなくなる、という問題も出てくる。一度環境林にゾーニングした後、所有者が生産林に戻すことを希望するケースもある。ゾーニングには十分注意しないといけない。

相馬委員：環境林から木材生産できないのは深刻かつ現実的な問題だが、日本の山は炭素の面から見ると宝の山で大企業から多くの問い合わせを受けている。生物多様性や水源涵養のサービスについても見える化する必要がある。公益的機能というものに価値がついて、そこにお金が流れてくるような仕組みが必要。

渡辺委員：環境林と循環林の2つにはっきり分類できるのか、中間的なものもあってもよいのでは。例えば、県の森の力再生事業でできないところについては、市の間伐事業を使うことで、森林を面で捉えて整備することができていた。これを2種類にゾーニングしてしまうと、面でとらえることができず、整備がなされず歯抜けになってしまうところが生じるのではないかと心配している。

中山（勉）委員：森づくりの最終的な目的は災害に強い山づくりだと考えている。これまでも災害に強い山づくりを目指してきたが、一昨年の台風は100年に一度くらいの災害だったと思う。山づくりの財源の一部は税金でもあるので、納税者の皆さんの

生の声も聞きながら、ご理解いただけるようにする必要もある。清水森林組合はとても小さな組合で、森林所有者も所有面積が小さな人が多いが、組合員自体も減っている。環境林にしても循環林にしても、まちづくりとセットで、市民の理解を得ながらやっていきたい。両河内のような中山間地から市街地へ働きに出る人が多かったが、農林業を見直す傾向も少しある。そんな中で、やはり災害に強い山づくりにおいて一番重要なのは林道になると思う。崩壊したら復旧するというのが今のやり方。理想だけでなく現実も見ながら話し合いをすすめていきたい。

森竹委員：井川の森林の環境林としての価値や森林維持の大変さを、下流域の人たちは理解してくれていない、水や酸素をとめてしまいたいと思う。上流の森林の維持管理が無ければ下流の生活が成り立たないということを知ってほしい。

中山（治）委員：災害に強い山づくりのためには林道が必要、ということが一般に理解されていないため、税金を使って林道を作ることへの反発が生じている。この計画も、専門的な人だけに読まれるものではなく、一般の人にも読んでもらえるよう、言葉や表現を考えていきたい。

白木委員：駿河区には山が無いので特別な事業は無いが、自分自身は内装業をやっているため木材を使っている。皆さんが苦労して整備している森林を使わせていただいている。

手入れされていない山を見ることが多く、担い手不足を感じている。一昨年の台風10号の被害を受けた林道等が、なかなか復旧しない場所があることから、予算不足も感じている。持続可能な森づくりについて、この会で結論を出していかないといけないと思っている。

小泉委員：広葉樹が多いので、紅葉期はとても美しい観光資源になる。環境林というと観光にプラスになるが生産にはマイナスなイメージを持った。関係者に理解してもらえるよう説明していく必要がある。山が極めて急峻で、作業道を無理やり作るとそれが原因で崩れてしまうこともあるが、木材を生産するにはどうしても道が必要。そのあたりの話が出てくると思う。人工林は、一度人工林にしたら維持管理を継続しないと崩れてしまう。環境林でも、維持管理が不要なわけではなく、昔の炭焼き等のような手入れ・間伐をしないと崩れてしまう。

鈴木（勝）委員：土地の所有権移転に関わる仕事をしている。測量は現地で可能だが、相続人調査は行政や資格所有者にしか権限が無いため、苦労している。住民票に連絡先（電話番号）を記載してもらえると、森林の施業や集約化もスムーズにできるようになると思う。

狩野委員：玉川地区で林業を営んでいて、住宅等に用いる建材の販売を生業としている。最近では、レストランのピザ窯で使うナラ材の薪なども販売している。備長炭なども人気なようだが、薪や炭は環境林で生産するものだと思う。環境林と循環林の区分

が難しいと感じている。

佐野委員：林業に関する制度は、国、県、市と降りてきていて、静岡県に関しては西部に偏った制度になっていると感じている。静岡市は政令市なので、独自のものを考えるべきだと思う。

所有者が維持管理を行ううえでは何かしらのインセンティブが必要。例えば特定のエリアの同一所有者の森林を合筆し、所有権移転の手続きの簡素化をするなど。

国が良かれと思って作った制度でも、運用していくうえで自由が利かないとうまういなくなる。思い切った考え方での、改革や発展的な取り組みが必要。

木材業協同組合でも、いろいろな普及啓発事業を行っているが、一般市民の皆さんに森林の公益的価値が理解してもらえていないのはとても残念。

木材業協同組合での納材はあまり例のないことで、よいビジネスモデルとしての視察を各所から受けている。他にはない新しい取り組みにどんどん挑戦していくべき。

静岡市のオクシズ材を少しでも高く買い取るためには、少しでも高く売れるよう付加価値をつける加工をしなくてはならない。製材所では付加価値をつけづらいので、さらに下流でどのような用途に使うかということも工夫する必要がある。

補助というのは、補助を受けて儲けが出たとかコストを安くできたとかいう話ではなく、山に返すためのお金。補助金が無駄遣いだという市民の声に対して、しっかり説明すべき。おいしいしずまえの魚を食べられるのは、山の森林のミネラルが流れ出ているからであり、オクシズ・しずまえをもっとうまく使って山の価値を伝える必要がある。オクシズ協議会で実施している「森林の市」では多くの来場者に山の価値を伝えている。

速水委員：立木価格に対して育林費が高いから再造林されない、という考え方があるが、立木価格は過去の投資の成果であるのに対し、育林費は将来への投資であり、それを比較すると論理が破綻してしまう。

1980年代後半の林業従事者数は12万人ほどだったが、その頃の年間の人工は1000万人だった。現在は林業従事者数4.2万人で年間人工は700万人。従事者数は減ったが人工はさほど減っていない、というのは、過去は兼業が多かったが現在は専業が多いから。労働力が減ってうまくいっていない、というのは行政の逃げである。